

# 「商工技芸浪華の魁」にみる、 明治中期の大阪船場の卸売商の分布

岡 絵 理 子

要 旨：本研究は、明治15（1882）年、垣貫一右衛門の編集により発行された「商工技芸浪華の魁」を用い、デジタル化された「大阪市街全図（大正2（1913）年発行）」や、「大阪市及附近営業者紹介地図（大正3（1914）年発行）」を参考にしながら、掲載されている店舗の分布を業種で見ることにより、「浪華の魁」がつくられた当初の、商都大阪の原点である船場の空間構造をみるものである。

キーワード：「商工技芸浪華の魁」、大阪船場

## 1. 研究の背景と目的

江戸時代、享保15（1730）年に大坂堂島に堂島米会所が開設されて以来、全国の年貢米が集まり売買が行われた。全国の領主は、大阪で米を売り、その代金で物資を購入した。大阪は米市として繁栄するだけでなく、全国から集められた物資を購入することのできる卸売りのまちとして発展した。明治2（1869）年、幕府の衰退とともに堂島米市場は衰退し、堂島米相場会所は閉鎖されるが、明治4（1871）年の再興運動により、堂島米会所が開設され、保証有限会社堂島米商会所が設立された。この米取引による繁栄は、昭和14（1939）年10月米穀配給統制法の施行まで続き、大阪の卸の町としての役割も続いた。

本研究は、明治15（1882）年、垣貫一右衛門の編集により発行された「商工技芸浪華の魁」を用い、デジタル化された「大阪市街全図（大正2（1913）年発行）」や、「大阪市及附近営業者紹介地図（大正3（1914）年発行）」を参考にしながら、掲載されている店舗の分布を業種で見ることにより、「浪華の魁」がつくられた当初の、卸のまち大阪の空間構造を見るものである。本稿では大阪の中心的なまちであり、商都大阪の原点である船場を対象地域として分析を行うこととする。

## 2. 調査対象地域 船場の概要

船場は、北を土佐堀川、南を長堀川（現；長堀通）、東を東横堀川、西を西横堀川（現；阪神高速1号環状線北行き高架）に囲まれた、東西1km、南北2kmの地域である。最北に大阪城が載る上町台地の西に、豊臣秀吉により大阪城の城下拡張のため開発された埋立地である。豊臣秀吉は天正11（1583）年大坂本願寺の跡地に大阪城を築く。大阪城の城下は上町台地の限られた土地で、手狭

であったため武家地としての城内整備と同時に、町人の移転先として文禄3（1594）年から船場の開発を本格化させた。豊臣秀吉は、大阪に大阪城を築く一方で、隠居後の住まいとして伏見に伏見城を建設し、文禄5（1596）年にはその完成をみるが、直後に慶長伏見大地震が起こり、伏見城の城下も壊滅した。そのため伏見の商人の移住先としても船場の開発は急がれた。

豊臣秀吉は、天正18（1590）年、京都で「天正の地割」という都市整備事業を行なっている。平安京の貴族の屋敷地として作られた1辺120mの方形街区でできたまちは、応仁の乱により貴族が京都の街の中心部から移転したため、以降商人のまちとなるのである。街路に面して商家が並び、道を挟む商家群を町内の単位とする両側町が形成される一方で、街区の中心部は空き地となり土地を有効に使えていなかった。豊臣秀吉は土地の有効利用を目指し、120m方形街区をふたつに割る道を整備したのである。

この経験を得て、船場の街区は72mの方形街区とし、城と港をつなぐ東西の道を「通」とし3間（およそ6m）それに対し、南北の道を「筋」とし2間（およそ4m）として整備、さらに72mの方形街区を南北に分ける背割り下水「太閤下水」の整備した。敷地は全て「通」に面することとし、72mを8等分、間口9m奥行き36mの敷地とし、通りごとに、各地から呼び寄せた町人を住ませた。伏見町、淡路町、平野町などの町名として現在まで残っている。各町は通りに沿って東西に長く、城のある東側から一丁目、二丁目、三丁目、四丁目と並んでいる。このように整然と整備された街区と縦長の敷地は、現在でも船場で確認することができる。



図1 船場の位置図（1590年頃・筆者作成）

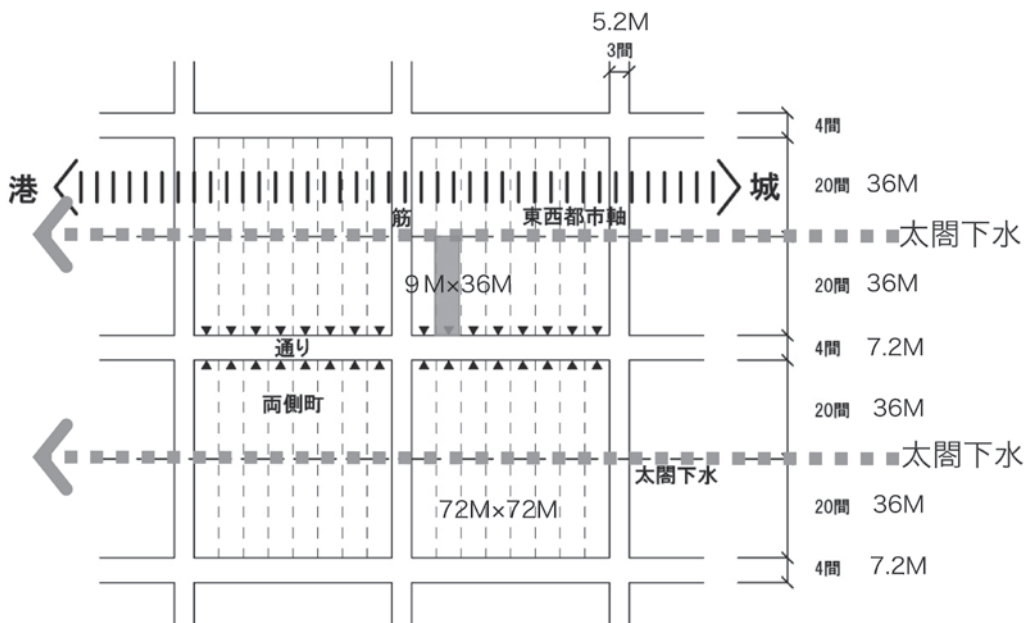


図2 船場の街区構成（筆者作成）

### 3. 「商工技芸浪華の魁」の概要

「商工技芸浪華の魁」は、明治15（1882）年、垣貫一右衛門により編輯、垣貫与祐により出版された8.3cm×18.5cmの掌サイズの大坂案内本である。本書は、東区の部、西区の部、南区の部、北区の部の4部構成となっており、店先の様子を表した図が掲載されているのが特徴である。店名と屋号、所在地とともに多くの店舗が掲載されているが、中でも大店ともいえる店先の様子とともに掲載されている店舗は、東区の部には128店舗、西区の部には99店舗、南区の部には98店舗、北区の部には54店舗、合計380店舗である。

東区の部は、おおよそ大坂三郷の北組、南区の部は南組、北区の部は天満組、西区の部は西船場にあたり、北区、南区が現在の中央区、北区は現在の北区のおおよそ南半分、西区は現在の西区のおおよそ東半分に当たる。船場は、東区と南区にまたがる。

編者である垣貫一右衛門は、大阪市北区曾根崎新地三十九番地に居を構え、明治15（1882）年から明治18（1885）年まで、大阪を中心に商業案内本を発行している<sup>1)</sup>。

表1 垣貫一右衛門発行の商業案内本一覧

NO.	発行年	(西暦)	書名	編集者	発行人
1	明治15年	1882年	商工技芸浪華の魁	垣貫一右衛門	垣貫一右衛門
2	明治16年	1883年	美濃の魁	福井熊次郎	垣貫一右衛門
3	明治17年	1884年	兵庫県下有馬武庫菟原豪商名所独案内の魁	亀岡左七郎	垣貫一右衛門
4	明治17年	1884年	備後の魁	亀岡左七郎	垣貫一右衛門
5	明治18年	1885年	浪華商工技芸名所智掾	亀岡左七郎	垣貫一右衛門
6	明治18年	1885年	商工函館の魁	垣貫一右衛門	垣貫一右衛門

### 4. 「商工技芸浪華の魁」の時代と都市計画

発行年である明治15（1882）年の大阪のまちの様子を、大阪の都市史と合わせて読み取る。

船場の建築物の形態や商空間に大きな影響を与えたのが、豊臣秀吉による船場の道路幅員に戻すことを目的に行われた「軒切り」である。船場における軒切りは、明治4（1871）年の大阪府から出された府達「道路ヲ狭隘ナラシムル可ラサル件」に始まる<sup>2)</sup>。明治9（1876）年の市街地地租改正に伴う現地丈量で、1：300の「民有地図」が作成され、道路幅の明確化がなされた。その後軒切りは順次行われることとなる。明治34（1901）年7月1日現在での大阪市道路面積における家屋による占有率は24.2%と極めて高く、この後重要路線や市電道路での軒切りが進められることとなる。明治23（1890）年の船場の地図では、南久宝寺町二丁目、三丁目、四丁目と、順慶町のほぼ全線が軒切りされているが、ほかに軒切りを確認できる道路はない。このように「浪華の魁」発行時は、船場の軒切りが行われていない状態で、堺筋の拡張が大正5（1916）年、船場建築後退線は御堂筋

1) 菅原洋一：「明治期商家銅版画資料に関する歴史情報学研究」、平成22年度～平成24年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）研究成果報告書、2013.3

2) 岡本訓明：「近代大阪における「軒切り」の展開について」、歴史地理学48-2（228）、pp.19-44、2006.3

の拡幅工事開始が大正15（1926）年であることを考えると、当時の大阪は、まだまだ東西を軸とするであったと考えられる。

## 5. 住所表記の方法

### (1) 御堂筋と淀屋橋筋

通説では、現在の御堂筋は、御堂筋の道路拡幅時まで「淀屋橋筋」と呼ばれており、拡幅時に西本願寺を北御堂、東本願寺を南御堂と名称を変え、その二つの御堂を繋ぐ広い道を御堂筋としたとしている。しかし、明治15（1882）年発行の「浪華の魁」では、淀屋橋筋表記が11件、御堂筋表記が4件と、すでに「御堂筋」という道路名が使われていたことがわかる。

### (2) 梅檀木橋筋と三休橋筋

中之島の中央公会堂前から南土佐堀川にかかる橋が梅檀木橋であるが、中央公会堂は明治44（1911）年竣工なので、この時には、豊国神社があった。南の長堀にかかる橋が三休橋であり、この筋は今回の調査では本町以北では梅檀木橋筋、本町以南では三休橋筋と呼ばれていたようである。

### (3) 難波橋筋・難波橋と藤中橋筋

現在北浜と天満を結ぶ堺筋の難波橋は、大正4（1915）年にパリのセーヌ川にかかるヌフ橋とアレクサンドル3世橋を参考にして製作されたと言われる橋であるが、これはもともと難波橋筋にかかっていた橋が、市電敷設の反対運動から堺筋に移ったもので、新しい難波橋が堺筋に架けられてからは、長堀にかかる藤中橋の名をとって藤中橋筋と呼ばれている。「浪華の魁」当時は、難波橋筋と呼ばれていたことがわかる。

### (4) 堺筋と長堀橋筋

堺筋は、長堀橋筋とも呼ばれている。長堀橋は昭和28（1953）年長堀の埋め立て時まで長堀にかかっていた橋である。堺筋という呼び名が圧倒的に多く使われるが、南の方では長堀橋筋とも呼ぶ。

### (5) 筋名と丁目

住所を示す方法としては、多くが横の通りと縦の筋で交差点を示し、方角を示して「○江入る」として示しているが、丁目も事例は少ないが使われている。

## 6. 店舗数と業種

船場の地域内で、「浪華の魁」に掲載されている商店は、126店舗である（表2）。そのうち、18.3%に当たる23店舗が薬の販売業で、最も多い業種であった。自社製造品を取り扱う薬業から、仕入れ販売する薬販売業も含まれる。ついで、服飾雑貨販売業の16店舗、12.7%であるが、いわゆる小間物である櫛、簪、半襟、下駄、蝙蝠傘、扇子、鼻緒などをあつかい、それぞれが専門店である。ついで、食品販売業の13店舗、10.3%であるが、和菓子、カステラ（1店舗のみ）、酒、鰹節、昆布、かまぼこ、茶などを専門として扱っている。和菓子店は2店舗で、今も残る「鶴屋八幡」と「駿河屋」である。ついで、宝飾品店が12店舗で、鼈甲、珊瑚、時計、眼鏡を扱う店を含めている。

表2 船場商業者業種割合（1店舗は省く）

n = 126		
業種	店舗数	割合 (%)
薬	23	18.3%
服飾雑貨	16	12.7%
食品	13	10.3%
宝飾品	12	9.5%
金物	8	6.3%
呉服・生地	6	4.8%
道具	6	4.8%
鞆類	5	4.0%
文房具	4	3.2%
料理屋	4	3.2%
楽器	3	2.4%
器	3	2.4%
宿	3	2.4%
機械・機器	2	1.6%
古物商	2	1.6%
蠟・油	2	1.6%

船場で1店舗のみの業種は、ゴム・雨合羽、マッチ、蚊帳、柿渋、革製品、玩具、金銀泊、刺繍、舶来物取扱、神輿、人力車、簾の販売店、そのほか、銅線の製造工場、鍼灸院が1店舗ずつあった。

## 7. 通、筋と店舗分布

東西の通で最も多くの店舗が立地していたのは、高麗橋通の15店舗、ついで安堂寺橋通の10店舗であった。

高麗橋通は、西から見ると正面に大阪城天守閣を見ることができる、東西の最も重要な道であった。東横堀川にかかる高麗橋は、12あった大阪の公儀橋の一つで、高麗橋周辺には豪商の店舗が立ち並んでいた。明治政府は高麗橋東詰に里程元標を置き、西日本の道路の起点とした。また、銀行街でもあった。立地している店舗は、足袋、三味線、柳行李、ゴム製品、刺繍、蝙蝠傘、マッチなどさまざまな珍しいものを取り扱う店舗が立地していた。

安堂寺橋は東横堀川に架かる橋で、大阪と奈良を最短距離で結ぶ暗超奈良街道に接続する重要な街道の始まるの場所である。安堂寺橋通に面する10店舗のうち4店舗は金物問屋であった。そのほか、眼鏡、時計などの宝飾品、金銀泊、縫い針、半襟、薬の専門店であった。

平野町通には、8店舗が立地している。平野町通は、昭和初期には「平ぶら」といわれるように、多くの飲食店が立地する商店街となるが、明治15（1882）年当時は、薬、酒、小間物、紙、油・蠟燭などが売られる卸売りの町であったようである。

南北の筋で最も多くの店舗が立地していたのは、堺筋の31店舗と、心齋橋筋の24店舗であり、この

2本の筋が群を抜く。堺筋の拡張が大正5（1916）年、船場建築後退線は御堂筋の拡張工事開始が大正15（1926）年であるので、明治18（1885）年当時は、拡張前で大阪の街は東西の町であったとされているが、実際は、堺筋と心齋橋筋は特に商店が立地していた南北の筋であったことがわかる。

堺筋は、船場から堺への道であったが、当時大川には橋がかかっていなかった。堺筋に面する31店舗の内訳を見ると、最も多いのは10店舗の薬販売店である。そのほかは、算盤卸商が3店舗、呉服・木綿の呉服が3店舗、蝙蝠傘、櫛、小間物、鼈甲など多様な店が立地している。

心齋橋筋は、江戸時代から賑わった商店街であり、明治6（1873）年に、心齋橋がドイツから輸入された鉄橋に変わる。心齋橋筋には、24店舗が立地し、服飾雑貨店が5店舗ある。半衿、扇子、鼻緒、鼈甲、小間物などを扱う専門店であった。そのほかには、時計を扱う宝飾店、靴店もあった。また、掲載されている3店舗の旅館のうち2店舗が心齋橋筋に面していた。

これらの店舗の業種別立地を図3、その内訳を表3に示す。



図3 船場地区の店舗分布（上位4業種、薬・服飾雑貨・食品・宝飾品のみ）

表3 図3に示す船場の店舗の内訳

番号	名称	屋号	業種	所在地
1	岡田嘉兵衛	岡田嘉兵衛	糸物足袋卸商	南久宝寺町通堺筋南東江入
4	坦和兵衛	坦和兵衛	東京花緒商	北久宝寺町心齋橋西江入
7	太田宇兵衛	太田宇兵衛	履物卸商	安土町通御堂筋東江入
9	奥村勇助	奥村勇助	鼈甲商	南久宝寺町心齋橋東江入
10	桃尾徳十郎	三国屋	珊瑚珠鼈甲商	北久太郎町中橋角
11	巨野甚治郎	巨野甚治郎	鼈甲商	高麗橋中橋角
12	井上久右衛門	井上久右衛門	鼈甲商	堺筋北久宝寺町角
13	藤井八三郎	藤井八三郎	鼈甲商	淀屋橋筋道修町南江入
14	今井定七	今井定七	鼈甲揃弁仕入所	南久宝寺町通中橋西江入
15	田村金太郎	田村金太郎	金銀時計商	高麗橋通浪花橋西江入
17	岡橋兵衛	岡橋兵衛	金銀時計商	心齋橋筋備後町東江入
18	坦和兵衛支店	坦和兵衛支店	時計商	心齋橋筋南久宝寺町北江入
23	高増弥助	小山堂	扇子仕入所	心齋橋通博労町南江入
30	清水為助	清水為助	編蝠傘製造所	高麗橋通堺筋東江入
31	六島発三郎	六島発三郎	内邦製編蝠傘	本町通中橋西江入
32	水上権兵衛	水上権兵衛	かまぼこ商	備後町通八百屋町東江入
38	渋谷利兵衛	渋谷利兵衛	鯉乃し蠟燭	高麗橋西詰西江入
39	津田元治郎	津田元治郎	足袋卸小売	高麗橋通1丁目西江入
47	立志堂	立志堂	売薬業	堺筋淡路町南江入 南久宝寺町1丁目道具屋町西江
48	小山忠兵衛	小山忠兵衛	売薬業	南久宝寺町一丁目道具屋町西入
49	長岡佐助	長岡佐助	薬種問屋	伏見町通り堺筋東
50	今中伊八	鶴屋八幡	菓子商	高麗橋筋井池角
51	澤宗貞	澤宗貞	売薬業	淡路町通御堂筋西江入
52	船岡武之助	船岡武之助	売薬業	淡路町通5丁目
53	佐藤衛生堂	佐藤衛生堂	売薬業	淀屋橋筋今橋北江入
55	駿河屋	駿河屋	菓子商	淡路町八百屋町角
56	河村古僊支店	河村古僊支店	売薬商(開達丸、開達散)	高麗橋柵木橋角
57	増田宇兵衛	増田宇兵衛	売薬商(順血湯)	道修町1丁目八百屋町角
58	小野市兵衛	小野市兵衛	和漢洋薬種商、登荷物売捌	道修町2丁目14番地
59	中川傳兵衛	中川傳兵衛	櫛卸商	北久太郎町通堺筋西江入
61	花月堂	花月堂	一入加須天伊良司	北濱通堺筋西江入
63	森田傳七	森田傳七	薬種問屋	伏見町通堺筋東江入
64	谷回春堂	谷新	医用丸散薬種、膏製煉所問屋	堺筋伏見町角
65	小山忠兵衛	小山忠兵衛	御湯薬商	堺筋南久太郎町北江入40番地
67	喜多村藤兵衛	喜多村藤兵衛	売薬業	平野町通中橋西江入
68	小西宗七	小西宗七	売薬商	道修町堺筋北江入
69	竹谷利兵衛	松寿堂	売薬業	高麗橋通5丁目9番地
71	松尾	徳寿堂	蘭方ウルルス	淡路町4丁目
72	小西儀助	小西儀助	西洋薬種問屋	道修町堺筋角
73	安達吉右衛門	安達吉右衛門	小児龍子丸	備後町通浪花橋西江入
74	中井一馬	活養堂	ゆび薬	浪花橋筋瓦町角
84	伊東佐一郎	伊東佐一郎	小間物商	御堂筋淡路町角
86	山口金助	山口金助	東京小間物商	平野町通心齋橋西江入
88	塩路嘉兵衛	八幡屋	小間物商	北久宝寺町通三休橋東江入
90	木村忠三郎	芝翫春	小間物商	平野町通柵木橋西江入
95	八川卯之助	八川卯之助	半衿商	御堂筋淡路町南へ入
100	菅野直治郎	菅野直治郎	珊瑚明石玉商	堺筋南久太郎町南へ入
103	石寄喜兵衛	米喜	名酒売捌所	平野町通堺筋西へ入
105	川勝七造	川勝七造	名酒売捌所	瓦町通堺筋西江入
111	塩田忠兵衛	塩田忠兵衛	料理味噌製造所	瓦町井池角
117	本田清吉	本田清吉	東朱墨仕入所	備後町通堺筋東へ入
119	宮川伊兵衛	餅伊	餅商	御堂前
241	角利助	角利助	時計商	心齋橋安堂寺町南江入
243	安居萬鶴	安居萬鶴支店	茶卸商	末吉橋通3丁目
253	福井長治郎	福井長治郎	かまぼこ商	心齋橋順慶町東へ入
257	井上浅	井上浅	編蝠傘商	心齋橋筋順慶町南江入
281	宇山善七	宇山善七	売薬商	順慶町中橋南江入
282	森田平助	森田平助	売薬商	三休橋塩町角
284	坂井卯作	坂井卯作	売薬業	安堂寺町堺筋西江入
300	森田萬作	いよ万	下駄商	順慶町通井戸の辻東江入
305	白水利兵衛	白水利兵衛	北海道荷更商、昆布卸売商	長堀橋北詰東江入
306	栗山善兵衛	栗山善兵衛	昆布商	心齋橋北詰北江入
311	小高勝兵衛	小高勝兵衛	半衿仕入所	心齋橋安堂寺町南江入
323	吉岡清治郎	吉岡清治郎	眼鏡商	心齋橋安堂寺町北江入

## 8. まとめ

「商工技芸浪華の魁」が出版された明治15（1882）年は、近代都市としての船場の整備はまだ始まっておらず、江戸時代の様相そのままの街並みであったことが推察される。

地図では、太閤秀吉が町割をした整然とした方形街区の並ぶ船場は、東西の通に店舗が並ぶ街であるとされてきたが、東西の道であっても、京につながる高麗橋通、奈良につながる安堂寺橋通は、特に多くの店舗が立地し賑わっていたことが見て取れる。また、船場が南北のまちになるのは、堺筋、三休橋筋、御堂筋の拡幅を行った「商都船場の大改造」の後であったと言われているが、心齋橋筋、堺筋は縦の筋の店舗が面することがない道でもあったが、明治15（1882）年にはすでに多くの店舗が立地しており、縦の通りの商店街を形成していたことがわかった。中之島を中心とした海運だけでなく、奈良、京都とのつながりを持ちながら船場が発展してきたことがわかる。

東西に連なる、同業者街であることもよく言われていることであるが、船場の中でも北の方に薬の販売が多いことは見て取れるが、東西の通りである道修町への薬問屋の立地はまだ明確ではなく、むしろ堺筋への立地が多かったこともわかった。

本町から北の北船場では、高麗橋、平野町に賑わいがあり、本町から南の南船場では、堺筋と心齋橋に店舗の集中がみられ、本町界限には大店の立地がむしろ少ないことが明らかとなった。

この後、船場では軒切り、都市計画道路の整備、船場建築後退線の指定など近代化を目指した都市計画が行われる。この道路整備により敷地面積が少なくなったため、居宅部分の十分な広さがとれなくなり、また会社の近代化もあり、家族の生活の場は店舗部分と切り離され郊外住宅地へと流出する。こうして、船場の人口は大きく減少したと言われている。これらの都市計画事業が、船場の建物の高層化、近代化を図ることとなり、その後の街の姿は現在のまちの様子へとつながることとなる。



小野薬品工業株式会社



鶴屋八幡

大阪の老舗（1885（明治18）年「商工技芸浪華の魁」より）

（おか えりこ 関西大学環境都市工学部教授）